

＜10 万人科学者技術者集会＞  
『基礎研究の振興と工学教育』シンポジウムの報告

主催：日本工学会 共催：日本工学アカデミー/材料連合フォーラム/日本工業教育協会  
協賛：177 学協会 後援：文部省/科学技術庁/通商産業省  
幹事学会：日本鉄鋼協会ほか 9 学協会

会誌「鉄と鋼」Vol. 78 No. 1 に「学術法人法（仮称）制定の動きに関する報告」を掲載し、同時に本シンポジウムが開催された旨を記したが、今月号では、本シンポジウムの概要を報告する。

平成 3 年 11 月 27 日(水)の午後から夕刻にかけて、東京赤坂の鹿島 KI ビル地下大会議室において日本工学会主催、日本アカデミー・材料連合フォーラム・日本工業教育協会共催、177 学協会協賛、文部省・科学技術庁・通商産業省後援による標記シンポジウムが 400 余名の参加者を集め開催された。

主催者である『日本工学会』（会長：石川六郎）は明治 12 年 11 月 18 日に創立されたわが国最古の工学系学会で、現在 82 学協会・所属会員 54 万人より構成されている社団法人であり、わが国が技術立国としての発展をみた礎を担った由緒ある工学系学会の本家である。

このたび開催された当シンポジウムは、かねてより脆弱化が伝えられているわが国の大学工学教育の再生のための諸策を討議、工学界共通の課題に昇華させるための試みであって、サブタイトルは『大学の改革と学術法人活性化を目指して』である。

予想を上回る多数の参加者は二十代の若者から八十代の先達まで多彩であって、石川会長の開会の辞から今泉副会長による閉会の辞に至るあいだ退席する者もなく、向坊講師による基調講演から始まった全プログラムは、それぞれのセクションごとに配された座長が司会とコメントーターを兼ねて与えられた課題に華を添えるなど充実した構成をとっていた。

すなわち『わが国の工業教育の諸問題』（日本工学ア

カデミー会長・日本工業教育協会会長 向坊 隆）『日本の工業と工学の将来』（日本学術会議会長 近藤次郎）『大学の活性化への提言』（東京工業大学学長 末松安晴）『大学の活性化を願って』（東レ(株)会長 伊藤昌寿）『21 世紀をリードする大学へ望む』（産業技術委員会政策部会長）『大学の改革と学術法人活性化』（日本工学会 政策委員長 内田盛也）である。

平成 3 年 10 月 8 日に(株)経済団体連合会によって『21 世紀をめざした研究開発体制の確立を望む—大学、国立試験研究機関の充実と、科学技術分野の国際貢献のために—』が発表されたが、その冒頭に“国は、将来に対する備えを怠っている”と銘記されている。今回のシンポジウムで討議された諸々の課題はほぼこの一点に収斂されるように思えるが、明治以降 100 年に及ぶ近代工学教育の蓄積の上に花開いた今日の＜技術王国日本＞の明日が後継者の育成という点で転換期に至ったことを確認しつつ、その将来展望をどのように描くべきかを工学関係者が一堂に会して模索した嚆矢と位置づけられよう。

なお、シンポジウム終了直後に日本工学会と日本工学アカデミー首脳による記者会見があり、爾後、中山前外務大臣、衆参国會議員、その他の諸氏を迎えての懇親会が、KI ビル内のアトリウムを会場として開催された。

////////// 原稿募集 // ISIJ International 特集号 //

Molten Slags and Fluxes

溶融スラグ、ガラス、マグマ及び精錬用フラックスの物理的、化学的性質に関する特集号を ISIJ International 1993 年 1 月号にて発行する予定です。

スラグとフラックスに関するすべての物理化学的観点、例えば

- |                 |                |
|-----------------|----------------|
| ①構造と物理化学的性質     | ⑥スラグ-メタル反応の速度論 |
| ②熱力学的性質         | ⑦スラグの性質の数学的モデル |
| ③スラグとフラックスの物理化学 | ⑧溶融塩を用いた表面処理   |
| ④輸送現象           | ⑨その他           |
| ⑤スラグ-メタル平衡      |                |

を内容とする原著論文、Review 記事を募集致します。

原稿投稿の締切：1992 年 5 月 20 日

問合せ先：日本鉄鋼協会 編集・業務室 欧文誌係